53. 青年期にある未婚・未産女性の骨盤形態とライフスタイルとの関連－骨盤外計測を用いて－

小松輝子、村上歩、濵田佳代子、石上悦子、池内和代、尾原喜美子

高知大学教育研究部医療学系看護学部門

１．研究の背景と目的

近年の日本人女性は、痩身志向や睡眠不足などライフスタイルの変化により低身長傾向にあると言われている。2010 年の文部科学省「体力・運動能力調査」では、痩身傾向児出現のピークが思春期早期の 12 歳から進んでいることが明らかになった。思春期は女性の骨盤を形成する重要な時期である。このようなライフスタイルの変化は妊娠・出産を控えた青年期女性の骨盤形態や骨盤の歪みに影響を及ぼす可能性があると考えた。そこで、青年期にある未婚・未産女性を対象に身体侵襲の少ない骨盤外計測を用い、骨盤形態と骨盤の歪みに影響するライフスタイルとの関連について明らかにすることを目的に本研究を行った。今回は姿勢との関連について報告する。

２．方法

Ｋ大学及び大学院の 18 歳～29 歳までの未婚・未産女性の内、研究への同意が得られた者 91 名を対象に、無記名自記式質問紙法および身体計測（身長、体重、BMI、骨盤径線、肩の高さ、足関節の外旋）を行った。分析方法は、統計ソフト（IBM Spss Statistics 21）を用い単純集計および記述統計後、Pearson の相関係数、t 検定、カイ２乗検定、Fisher の直接確率法を行った。有意水準は 5%未満とした。倫理的配慮として、対象者に研究の趣旨、配慮（参加・途中辞退の自由、匿名性の厳守、研究に限定したデーターの使用）、結果公表の可能性について書面と口頭で説明し、同意を得て実施した。

３．結果

対象者の年齢は、21.2±2.25 歳。身長は 157.7±5.52 ㎝。BMI は 20.9±2.23。骨盤経線の平均値は、全て正常値を上回り、特に、大転子間径 30.2±1.37 ㎝と外結合線 20.3±1.13 ㎝の延長が著明であった。骨盤経線と姿勢との関連では、足を組まない姿勢(P<0.01)や片方に重心を置く姿勢(P<0.05)で、骨盤経線平均値に有意差が見られた。骨盤の歪みに関しては、外斜径（9.9%）・側結合線（6.6%）に左右差が、9.9%に扁平骨盤が見られたが姿勢との関連は無かった。また、91 人中 5 人（5.5%）に棘間径・稜間径共に 2 ㎝以上狭い幅狭傾向の腸骨が見られた。

４．まとめ

思春期女性の骨盤は、身長の低下傾向による縮小は見られず、むしろ拡大傾向にあった。特に、骨盤入口前後径と骨盤濶部横径の拡大が確認された。足を組まない姿勢や片方に重心を置く姿勢は、骨盤入口前後径の拡大に関連があった。また、骨盤の歪みは、約 10%の人に見られたが姿勢との関連は無かった。